

大学院生の不登校傾向を測定する試み

堀井 俊章

Measurement of the Tendencies of Graduate Students to not Attend Classes

Toshiaki HORII

問題と目的

近年の学生相談の状況として、大学院生の相談件数は増加傾向にある（池田，2010；日本学生支援機構，2007）。日本学生支援機構（2007）の報告書「大学における学生相談体制の充実方策について」によると、「近年の大学院進学率の高まりとともに、目的意識や必要な資質を持たない学生が進学することもまま見受けられる。学部時代に解決しておかねばならない心理的課題を持ち越している場合も多い。入学後は研究環境への再適応が課題となり、研究室内、とりわけ教員との人間関係に困難が生じやすい。また修了に際して、専門分野を活かせるか否かなどの進路選択や、社会における自らの位置づけが改めて課題となってくる」と指摘されている。

このような大学院特有の複雑な課題を背景に、大学院に登校しなくなり、不登校・ひきこもり状態になる大学院生が存在する。事実、大学院におけるひきこもり状態の発生率は1.06%と推定されている（井出・水田・谷口，2011）。また、不登校・ひきこもり状態には至らずとも、その予兆ともいえる不登校傾向についての基礎データも存在し、例えば、大学院（理系）の場合、現在在籍する大学院について「行きたくないと思うことがありますか」という項目に対して、「頻繁に思う」と回答した大学院生が男子5.5%、女子3.7%であり、「ときどき思う」という回答を含めると男子46.9%、女子52.4%となっている¹⁾（堀井，2006）。

大学の学部にて在籍する学生の「不登校傾向（大学の正課活動への回避傾向）」については、それを測定する「大学生不登校傾向尺度」（堀井，2013）が開発されている。大学生不登校傾向尺度を用いて実施された様々な調査の分析結果によると、学部生の不登校傾向は、精神的健康度の低さ、精神的回復力の低さ、対人恐怖心性、うつ状態、発達障害特性、アイデンティティ拡散、自己否定感などとの密接な関連性が報告されている（堀井，2013，2014，2015，2016；高田他，2015）。その一方で、大学院生の不登校傾向については実証的研究の進展が見られない。その一因は大学院生の不登校傾向を測定する有効なツールが存在しないことにあると考えられる。

そこで本研究は、大学生不登校傾向尺度をもとに大学院生の不登校傾向を測定する尺度を構成する。その上で、学部生のデータと比較しながら大学院生の不登校傾向を測定する尺度の因子構造を確認し信頼性の検討を行う。また、併せて学年差と性差についても検討する。このような研究は現代大学院生の心性を理解し、学生相談研究の発展のためにも意義があると思われる。

方法

調査対象者および調査時期

首都圏近郊の大学院修士課程に在籍する大学院生 763 名 (平均年齢 23.3 歳, $SD=2.87$) を対象に質問紙調査を 2012 年 5 月～7 月に実施した。なお, 学部生は同時期に収集された堀井 (2016) のデータを用いた。すなわち, 学部生の対象は 4 年制大学に在籍する学部生 838 名 (平均年齢 19.8 歳, $SD=1.24$) であった。大学院生・学部生の性別・学年別の人数は Table 1 に示した。

Table 1 調査対象者数 (人)

	男性	女性	計
B1	91	90	181
B2	115	108	223
B3	102	99	201
B4	114	119	233
小計	422	416	838
M1	317	63	380
M2	322	61	383
小計	639	124	763
合計	1,061	540	1,601

注) B1 は学部 1 年生, B2 は学部 2 年生, B3 は学部 3 年生, B4 は学部 4 年生, M1 は大学院 1 年生, M2 は大学院 2 年生を表す。

質問紙

大学院生の不登校傾向を「大学院の正課活動への回避傾向」と定義した。学部生の不登校傾向を測定する従来の大学生不登校傾向尺度は, 内容として総じて大学院生の不登校傾向も測定可能であると考えられた。但し, 一部文言を改変する必要がある。大学生不登校傾向尺度の項目内の「大学」という語を「大学院」に改変した。また, 教示文において, 項目内の「授業」は研究, 演習, 実習, 実技, 実験を含むことを説明に加えた。尺度名は大学院生不登校傾向尺度と命名した。尺度は 12 項目から構成される。各項目に対する回答は, 「非常にあてはまる (6 点)」「あてはまる (5 点)」「ややあてはまる (4 点)」「どちらともいえない (3 点)」「ややあてはまらない (2 点)」「あてはまらない (1 点)」「全然あてはまらない (0 点)」の 7 件法で求めた。得点が高いほど各項目の意味する不登校傾向が高いことを表す (逆転項目を除く)。また, 学部生には大学生不登校傾向尺度 (12 項目 7 件法) を用いた。

結果と考察

探索的因子分析

大学院生不登校傾向尺度 12 項目について因子分析 (主因子法) を行った。固有値の減衰状況と解釈可能性から 2 因子を抽出しプロマックス回転を行った。2 因子の累積

寄与率は 58.0%であり，因子間の相関係数は.60 と中程度であった。本研究で得られた因子構造は学部生の堀井（2013）の結果と概ね同様であり，それを受けて，第 1 因子は「登校回避行動」，第 2 因子は「登校回避感情」と命名した。

次に，大学生不登校傾向尺度 12 項目について因子分析（主因子法）を行った。固有値の減衰状況と解釈可能性から 2 因子を抽出しプロマックス回転を行った。2 因子の累積寄与率は 55.8%であり，因子間の相関係数は.47 と中程度であった。この結果も堀井（2013）と概ね同様であり，第 1 因子は「登校回避行動」，第 2 因子は「登校回避感情」と命名した。以上の結果を Table 2 に示した。

Table 2 尺度の探索的因子分析の結果

項目	大学院生		大学生	
	不登校傾向尺度		不登校傾向尺度	
	因子 1	因子 2	因子 1	因子 2
登校回避行動				
1. 大学院**を休みがちである	.78	-.04	.83	-.03
2. 欠席しがちな授業がある	.78	-.03	.81	-.02
3. なんとなく大学院**に行かないことがある	.68	.09	.80	.03
4. 一日の授業がすべて終わる前に帰宅することがある	.66	.01	.65	.03
5. 大学院**に行きたいけれどもなぜか行けないことがある	.64	.05	.58	.01
6. 授業を遅刻しがちである	.40	.18	.53	.05
登校回避感情				
1. 日曜日の夜，明日 大学院**に行きたくないと思うことがある	-.15	.96	-.12	.86
2. 朝，今日は大学院**に行きたくないと思うことがある	-.01	.87	-.03	.86
3. 大学院**をしばらく休みたいと思うことがある	.19	.53	.17	.57
4. 一日の授業がすべて終わる前に帰宅したくなることがある	.19	.50	.04	.58
5. 参加したくない授業がある	.28	.34	.10	.52
6. 大学院**に行くのは楽しい*	-.10	-.31	-.01	-.43
因子間相関	因子 1	—	.60	—
				.47

注 1) * 逆転項目

注 2) ** 学部生を対象とした調査では「大学院」は「大学」と表記されている。

確認的因子分析と信頼性

仮定したモデルは，堀井（2013）による，学部生のデータを用いて探索的因子分析を行って得られた「登校回避行動」と「登校回避感情」の 2 因子構造である。大学院生不登校傾向尺度 12 項目のデータについて最尤法による確認的因子分析を行った。モデルの適合度は $\chi^2(53) = 391.37(p < .01)$, GFI = .91, AGFI = .87, CFI = .91, RMSEA = .09 で

あった。次に、大学生不登校傾向尺度 12 項目のデータについて、同様に確認的因子分析を行った。モデルの適合度は $\chi^2(53) = 400.09(p < .01)$, GFI = .92, AGFI = .88, CFI = .92, RMSEA = .09 であった。いずれも適合度は概ね許容範囲内であった。

大学院生不登校傾向尺度および大学生不登校傾向尺度について、それぞれ因子別に、当該因子に高い負荷量を示した項目のまとまりを下位尺度項目（各 6 項目）とし、項目の粗点の合計を下位尺度得点とした。Cronbach の α 係数は、大学院生不登校傾向尺度の「登校回避行動」が .83, 「登校回避感情」が .82, 大学生不登校傾向尺度の「登校回避行動」が .85, 「登校回避感情」が .82 であり、いずれの下位尺度も高い信頼性（内的整合性）をもつことが確認された。以上の結果を Table 3 に示した。

Table 3 尺度の確認的因子分析の結果

項目	大学院生		大学生	
	不登校傾向尺度 因子 1	不登校傾向尺度 因子 2	不登校傾向尺度 因子 1	不登校傾向尺度 因子 2
登校回避行動				
1. 大学院**を休みがちである	.76	—	.82	—
2. 欠席しがちな授業がある	.72	—	.81	—
3. なんとなく大学院**に行かないことがある	.77	—	.80	—
4. 一日の授業がすべて終わる前に帰宅することがある	.64	—	.67	—
5. 大学院**に行きたいけれどもなぜか行けないことがある	.70	—	.59	—
6. 授業を遅刻しがちである	.53	—	.55	—
登校回避感情				
1. 日曜日の夜、明日 大学院**に行きたくないと思うことがある	—	.84	—	.83
2. 朝、今日は大学院**に行きたくないと思うことがある	—	.88	—	.87
3. 大学院**をしばらく休みたいと思うことがある	—	.65	—	.61
4. 一日の授業がすべて終わる前に帰宅したくなることがある	—	.61	—	.58
5. 参加したくない授業がある	—	.52	—	.54
6. 大学院**に行くのは楽しい*	—	.37	—	.42
因子間相関	因子 1	—	.64	—
α 係数		.83	.82	.85

注 1) * 逆転項目

注 2) ** 学部生を対象とした調査では「大学院」は「大学」と表記されている。

学年差と性差

大学院生不登校傾向尺度と大学生不登校傾向尺度のそれぞれ下位尺度ごとに、学年別・性別に平均値と標準偏差を算出した（Table 4）。それぞれの尺度分布を確認した

ところ、「登校回避行動」は全体的にやや左方向に偏る傾向が見られた。これは登校を回避するという行動面がやや生起しにくいという性質を反映したものと考えられた。「登校回避感情」については正規分布に近似していた。これらの分布は、堀井（2013）の学部生の結果と概ね同様であった。

Table 4 尺度の平均値と標準偏差

	学部生				大学院生	
	B1 <i>M(SD)</i>	B2 <i>M(SD)</i>	B3 <i>M(SD)</i>	B4 <i>M(SD)</i>	M1 <i>M(SD)</i>	M2 <i>M(SD)</i>
登校回避 行動	6.71(5.74)	8.06(6.76)	9.42(7.82)	9.75(7.95)	8.02(6.60)	9.13(6.72)
登校回避 感情	16.76(7.25)	19.81(7.23)	20.67(8.40)	18.33(7.65)	16.02(7.60)	14.20(7.39)

注 1) 各尺度得点の *M(SD)* は上段が男性、下段が女性を表す。

注 2) B1 は学部 1 年生, B2 は学部 2 年生, B3 は学部 3 年生, B4 は学部 4 年生, M1 は大学院 1 年生, M2 は大学院 2 年生を表す。

男女ごとに学年別に平均値をプロットした図を Figure 1 と Figure 2 に示した。次に、2 要因（学年×性）の分散分析を行った。その結果、学年差は「登校回避行動」と「登校回避感情」ともに有意であり、性差は「登校回避行動」で有意傾向が認められ、男性の得点が女性よりも有意に高い傾向が示された。なお、交互作用は認められなかった（Table 5）。

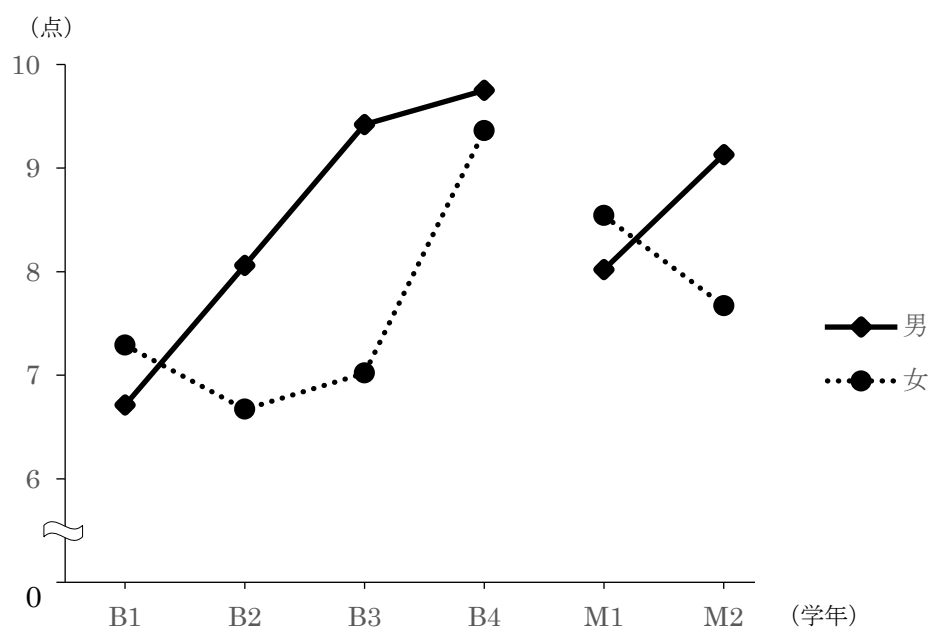


Figure 1 登校回避行動の学年別得点

注) B1 は学部 1 年生, B2 は学部 2 年生, B3 は学部 3 年生, B4 は学部 4 年生, M1 は大学院 1 年生, M2 は大学院 2 年生を表す。

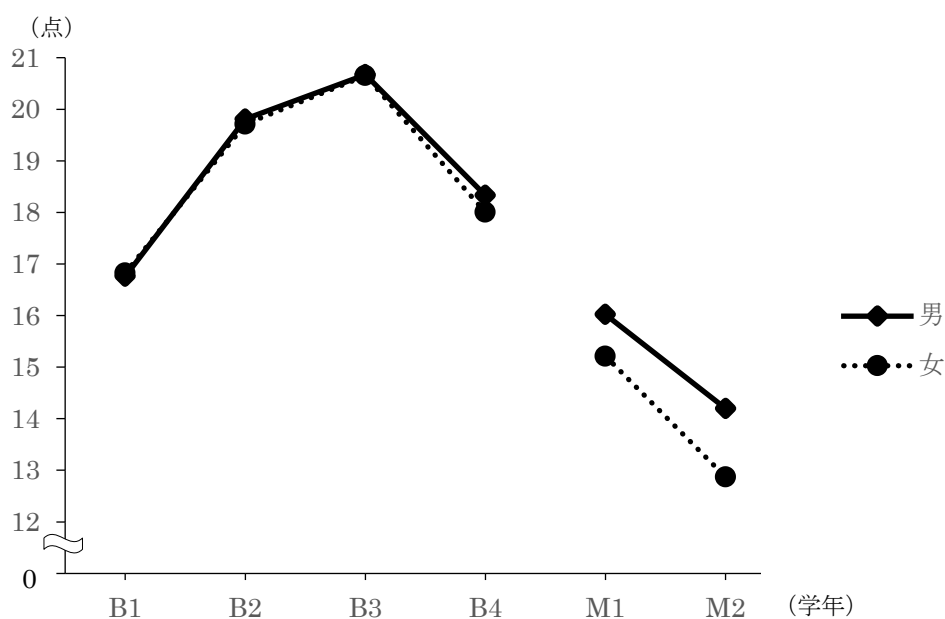


Figure 2 登校回避感情の学年別得点

注) B1 は学部 1 年生, B2 は学部 2 年生, B3 は学部 3 年生, B4 は学部 4 年生, M1 は大学院 1 年生, M2 は大学院 2 年生を表す。

Table 5 尺度の 2 要因 (学年×性) の分散分析の結果

	学年差 <i>F</i>	性差 <i>F</i>	交互作用 <i>F</i>
登校回避行動	3.64**	3.82 [†]	1.52
登校回避感情	26.65***	1.01	0.28

$p^{\dagger} < .10$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

「登校回避行動」と「登校回避感情」はそれぞれ学年差が有意であったため、Tukey 法による多重比較を行った (Table 6)。「登校回避行動」では、学部 1 年生の得点は学部 4 年生と大学院 2 年生よりも有意に低く、学部 2 年生の得点は学部 4 年生よりも有意に低かった。「登校回避感情」では、学部 1 年生の得点は学部 2 年生、学部 3 年生よりも有意に低く、大学院 2 年生よりも有意に高かった。学部 2 年生の得点は大学院 1 年生、大学院 2 年生よりも有意に高かった。学部 3 年生の得点は学部 4 年生、大学院 1 年生、大学院 2 年生よりも有意に高かった。学部 4 年生の得点は大学院 1 年生、大学院 2 年生よりも有意に高かった。大学院 1 年生の得点は大学院 2 年生よりも有意に高かった。

Table 6 学年差の多重比較の結果

		B1	B2	B3	B4	M1	M2
登校回避行動	B1	—			<		<
	B2	—	—		<		
	B3	—	—	—			
	B4	—	—	—	—		
	M1	—	—	—	—	—	
	M2	—	—	—	—	—	—
登校回避感情	B1	—	<	<			>
	B2	—	—			>	>
	B3	—	—	—	>	>	>
	B4	—	—	—	—	>	>
	M1	—	—	—	—	—	>
	M2	—	—	—	—	—	—

注) B1 は学部 1 年生, B2 は学部 2 年生, B3 は学部 3 年生, B4 は学部 4 年生, M1 は大学院 1 年生, M2 は大学院 2 年生を表す。

これらの結果について整理すると、「登校回避行動」では、大学院 1 年生と大学院 2 年生との間に有意な差が認められず、大学院において学年差はないことが示された。また、大学院 1 年生は学部生の各学年との間に有意な差がないことが示された。学部 1 年生と大学院 2 年生との間には有意な差が認められたが、全般的には大学院生と学部生との間に「登校回避行動」はあまり差異が見られないことが示唆された。

また、「登校回避感情」は、学部生では 2~3 年生でピークに達し、4 年生で低下するが、大学院 1 年生は学部 4 年生よりも低く、さらに、大学院 2 年生は大学院 1 年生よりも低いことが認められた。「学生生活サイクル」（鶴田, 2001, 2010）という理論によると、学部の中間期（2~3 年生）は「大学入学直後の表面的な適応を一時的に壊すような体験をする時期」であり、中だるみや無気力も生じやすいとされている。そのためこの時期には「登校回避感情」が一旦高まるが、中間期を脱すると「登校回避感情」は低下する（堀井, 2013）。そして、本研究からは、大学院に進学した者は「登校回避感情」がさらに低下することが示唆された。

昨今、進路意識や目的意識が希薄なまま「とりあえず」進学する若者が増加している（文部科学省, 2004；山口・堀井, 2017）。大学院への進学についても「進路について十分吟味せず、『とりあえず』、あるいは『なんとなく』進学している者」（池田, 2010）の存在が指摘されている。「とりあえず」進学した者は研究への意欲や向上心が低く、それに伴い「登校回避感情」が高まることが推測される。しかしその一方で、「大学院生は研究に多くの時間を割き、研究への自発的な問題意識や取り組みが求められる。そうした専門的な研究をとおして意欲や自信を高める者がいる」（池田, 2010）という指摘もある。双方の側面があり得るが、学生相談の従来知見を踏まえると、意欲や向上心が低い大学院生は確かに存在するが、学部生と比較して目立って多いということはない。大学院生全体としてみれば、学部生よりは比較的意欲が高いと考えられ、それに伴い「登校回避感情」が低下することが推測される。それは「登校回避

感情」との関連が生じうる悩みや不安、特に授業、進路、友人関係に関する悩みや不安が学部生よりも大学院生は少ない（日本学生支援機構, 2018）という調査報告からも裏付けることができる。但し、大学院に進学した学生が学部と同じ研究室に所属する場合は、環境への馴化の影響もあって「登校回避感情」の低下が促進される可能性もある。

性差については、「登校回避行動」において男性の得点が女性よりも有意に高い傾向が認められた。堀井（2013）は学部生の結果について、「男子は『孤立傾向』等を背景に、授業という集団場면을回避し、『登校回避行動』が高まりやすい」と指摘している。大学院生についても、男性は女性と比較すると、集団場面や対人場면을回避し、「登校回避行動」が高まる傾向にあると考えられる。

まとめと今後の課題

本研究は学部生のデータと比較しながら大学院生の不登校傾向を測定する尺度の因子構造を確認し信頼性の検討を行い、併せて学年差と性差についても検討することを目的とした。その結果、大学院生不登校傾向尺度は学部生の不登校傾向を測定する尺度と同様に「登校回避行動」と「登校回避感情」の2因子構造であることが確認された。また、下位尺度化した「登校回避行動」と「登校回避感情」はともに高い信頼性（内的整合性）をもつことが確認された。さらに、大学院生の「登校回避行動」は学部生と量的に総じて差異が見られず、男性が女性よりも高い傾向が示された。また、大学院生の「登校回避感情」は学部生よりも低いことが示された。

これまで学部生の不登校傾向は、その要因と推測される、精神的健康度の低さ、精神的回復力の低さ、対人恐怖心性、うつ状態、発達障害特性、アイデンティティ拡散、自己否定感などとの密接な関連性が報告されている（堀井, 2013, 2014, 2015, 2016；高田他, 2015）。しかし、大学院生についてはそれらの関連性が判明していないため、今後、大学院生不登校傾向尺度を利用し検証する必要がある。また、学生相談の実際という点からは、不登校傾向を有する大学院生への支援の在り方を検討することが求められる。

注

1) 堀井（2006）の表5及び表7による。調査対象は東北地方の大学院生744名（理系男子601名、理系女子82名、文系男子33名、文系女子28名）である。なお、表8には理系男子の大学院生41.4%、理系女子の大学院生48.8%とあるが、正しくは、表5にあるように、理系男子の大学院生46.9%、理系女子の大学院生52.4%である。また、大学院（文系）の場合、現在在籍する大学院について「行きたくないと思うことがありますか」という項目に対して、「頻繁に思う」と回答した大学院生は男子3.0%、女子0%であり、「ときどき思う」という回答を含めると、男子42.4%、女子53.6%となっている。

引用文献

- 堀井 俊章（2006）. 大学生における不登校傾向の実態調査. 山形大学保健管理センター紀要, 5, 62-67.
- 堀井 俊章（2013）. 大学生不登校傾向尺度の開発. 学生相談研究, 33, 246-258.

- 堀井 俊章 (2014). 大学生の不登校傾向と対人恐怖心性との関連. 横浜国立大学教育人間科学部紀要 I (教育科学), 16, 135-143.
- 堀井 俊章 (2015). 大学生不登校傾向尺度の開発 (続報). 横浜国立大学教育人間科学部紀要 I (教育科学), 17, 115-130.
- 堀井 俊章 (2016). 大学生の不登校傾向に影響を及ぼす心理的要因. 横浜国立大学教育人間科学部紀要 I (教育科学), 18, 106-114.
- 井出 草平・水田 一郎・谷口 由利子 (2011). ひきこもり状態にある大学生数の推定. Campus Health, 48(2), 186-191.
- 池田 忠義 (2010). 相談対象に応じた援助 大学院生 日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会 (編) 学生相談ハンドブック (pp.98-102) 学苑社
- 文部科学省 (2004). キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書——児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために—— Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002/010.pdf (2018 年 10 月 1 日)
- 日本学生支援機構 (2007). 大学における学生相談体制の充実方策について——「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」—— Retrieved from https://www.jasso.go.jp/gakusei/archive/_icsFiles/afieldfile/2015/12/09/jyujitsuhausaku_2.pdf (2018 年 10 月 1 日)
- 日本学生支援機構 (2018). 平成 28 年度学生生活調査結果 Retrieved from https://www.jasso.go.jp/about/statistics/gakusei_chosa/_icsFiles/afieldfile/2018/06/01/data16_all.pdf (2018 年 10 月 1 日)
- 高田 純・内野 悌司・磯部 典子・小島 奈々恵・二本松 美里・岡本 百合・三宅 典恵・神人 蘭・矢式 寿子・吉原 正治 (2015). 大学生の発達障害の特性と不登校傾向の関連. 総合保健科学: 広島大学保健管理センター研究論文集, 31, 27-33.
- 鶴田 和美 (2001). 青年期・アイデンティティの危機 下山 晴彦・丹野 義彦 (編) 講座臨床心理学 5 発達臨床心理学 (pp.135-150) 東京大学出版会
- 鶴田 和美 (2010). 大学生を理解する視点 学生生活サイクル 日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会 (編) 学生相談ハンドブック (pp.34-41) 学苑社
- 山口 源・堀井 俊章 (2017). 高校生の「とりあえず進学」と進路選択自己効力との関連に関する分析. 教育デザイン研究, 8, 80-87.